

# American Rock Lyric Landscape

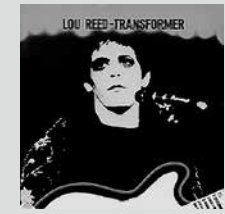
—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—



ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル  
イラストレーション=花井祐介

最終回  
ルー・リード  
「ワイルド・サイドを歩け」  
路地裏の世界を活写した革命的な一曲



Lou Reed  
"Transformer"  
RCA OLSLP4807 [1972]  
♪ソニー ©SICP30090

今回は、惜しくも亡くなってしまったルー・リードのことを、追悼の意を込めて取り上げてみたいと思う。ただし、残念ながらルー・リード作の歌詞を誌面に掲載することが権利上の関係でできなかったため、いつもと少し違ったスタイルで語らせてもらうことをご容赦いただきたい。

ルー・リードがメイン・ヴォーカルだったヴェルヴェット・アンダーグラウンドは、

実は当時の俺のリーダーには映っていなかった筈。彼らのデビューは1969年のことだ。当時、小学生だった俺はポップ・ミュージックが好きで、聴いていたのはタートルズやモンキーズ。ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのサウンドは、さすがに小学生にとっては暗過ぎたんだ。もつとも、興味がなかったのか、お小遣いがなかったのか、今となってはよくわからない

ニクソンと握手することがあったら、そのあと自分の指の数を数えた方がいい。ニクソンは詐欺師だ。あの政治家は信用できない」とことあるごとに言っていた。ニュース番組ではヴェトナムからアメリカ軍が引き上げていると発表していたが、それは嘘だと父親は言っていた。父親はアメリカの政府関係の仕事をしていて、当時は日本からアメリカ軍に生活必需品を送っていたんだ。ヴェトナムにいるアメリカ軍に送るステレオの数は、どんどん多くなっていく。まだ多くの軍人がヴェトナム海域の軍艦に乗っているはずだ。そして、こうも言った。毎日、飯一杯の食事しか食べず、自国の自由のために戦うヴェトナム人に、アメリカ軍が勝てるわけがない。

俺たち家族が暮らしていた立川米軍基地はヴェトナム戦争に関わるメインの病院のひとつだったから、そこでは戦争で怪我をした人をたくさん見えた。映画館に入ると、怪我をして車椅子やガーニー（動くベッド）で横になっている軍人のために、席の4分の1が外されていた。なかには腕がない人、足がない人、顔がない人もいた。俺たちにとってヴェトナム戦争は、すごく

近くて怖いものだった。その軍人は、俺たち高校生と年齢もあまり変わらなかった。そして俺はいつのまにか、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのサウンドが理解できるような年齢になっていた。

『トランスフォーマー』を聴きはじめたのはそんな頃だった。それは当時のアルバム『ジギー・スターダスト』でスーパースターとなっていたデイヴィッド・ボウイと彼のギターリスト・ミック・ロンソンがプロデュースに手を貸していたから、興味がそそられたのだと思う。

このアルバムの中のシングル・ヒット「ワイルド・サイドを歩け (Walk On The Wild Side)」は特に印象的だった。俺がそれまで聴いていたロックの曲(ラヴ・ソング、思い出しソング、そして反戦ソング)とは全然違う内容を歌っていたんだ。それまでのウィリアム・バロウズの小説にしか出てこなかった感じのテーマだ。

この曲には、何人かのストーリーが書かれている。最初はホリーという人物。彼はマイアミからニューヨークにくる間、眉毛を抜き足の毛を剃って、彼、だったのが彼女、になった。そこで路地裏の世界に

だけどね。

その頃の俺は、アメリカについて何にも知らなかったに等しい。アメリカの白く柔らかな下っ腹 (Soft White Underbelly) といって、鰐の白い腹のことをいう。アメリカの一番弱く、悪いところを指す言葉だ) に対する知識がまだなかった。俺は鎌倉で生まれたから、アメリカについて知っていることといえば、ロサンゼルスとハワイとテキサスだけだった。いつも太陽が照っているような、明るいイメージのアメリカだ。そんな子供にヴェルヴェット・アンダーグラウンドの音楽が理解できるはずがない。単にかっこいいバンドと思っていただけだったんだ。

ルー・リードがアルバム『トランスフォーマー』をリリースした72年は、16歳だった俺にとっては明るい希望が実感できていた年だった。ヴェトナム戦争が終わるまであと1年と聞かされていたから、16歳の俺はもう徴兵されまいだろうと思っていたんだ。

だが、その頃に父親から聞いていたいくつかの話を、今でも覚えている。その一つは、もしアメリカ大統領のリチャード・

入っていく、この曲を聴く人を誘うんだ。

裏街道を歩くのよ」と。男性と女性の境目を破壊する、性の解放」によって自らの可能性を追求するような人たちを象徴しているのだろう。

次に出てくる女性キャンディは、島(ニューヨークのマンハッタン)の外からやって来て、秘密の部屋で皆にフェラチオをしてあげていた。だが、モノを咥えているときも彼女の頭は冴えていて、やはり聴く人を誘う。裏街道を歩きなさいよ」と。

次はリトル・ジョー、彼は皆から金を巻き上げるハスラーだ。NYはそんなヤツが集まる場所でもある。この歌の主人公はジョーに向かつて言う。裏街道を歩け」と。

次はシユガー・プラム・フェリー。彼女はソウル・フードとそれを食べる場所を探しに来たと歌う。ここでのソウル・フードには、魂のための栄養」といった意味もあり、彼女はアポロ・シユガーに向かう。このシユガーという女性はきつと黒人で、そこで男たちに誘われる。おいシユガー、裏街道を歩きなよ」と。

最後の登場人物はジャッキー。彼女はスピードを出していた。このスピードは、

車と麻薬の名称の二つに掛けています。彼女は、その日、ジェイムズ・デイーンのような気持ちになっていたという。彼女がクラッシュするのはやむをえない。ジェイムズ・デイーンは自動車事故で亡くなったから、ここでは車のクラッシュとドラッグの中毒症状にかけているんだ。でも次の詩には、バリウムがあつたら助かったのだろうとある。クラッシュは車の事故のことを意味するだけじゃない。バリウムは、スピード中毒の人がそれを断ち切るときに医者が出すドラッグだ。彼女も言う、ねえあなた、裏街道を歩きさいよ」と。

そう、この曲で歌われている人物はすべて、アメリカの大都市の「wild side」＝裏街道、つまりアブない世界に入っていくような人たちだ。

ホリーはニューハーフ、キャンディは娼婦、リトル・ジョーはハスラー、シユガー・プラム・フェリーは遊び好きなシスター・ジャッキーはスピード狂のジャンキー。とても72年当時のアメリカのポップ・ソングに出てくるような人物像ではないよね。今こそ、こういったテーマは普通に歌われるのかもしれないが、40年前では革新的な



ことだった。

しかも歌われる人物は、驚くことにすべて実在の人たちだったんだ。皆、アンディ・ウォーホルのアトリエ…ザ・ファクトリーの常連たち。ホリーはホリー・ウッドローン、キャンディはキャンディ・ダリング、リトル・ジョーはジョー・ダレサンドロ、シユガー・プラム・フェリーはジョー・キャンベルの渾名、そして最後のキャラクターのジャッキーは、ジャッキー・カーティスだ。

そしてこの曲はシングル・カットされ、『ビルボード』ホット100のチャートで16位まで上がった。しかしシングル・カットされたヴァージョンではフェラチオのくだりは編集され、ほかの話は放送コードに引つかからないようにうまく直されていた。俺はこの「ワイルド・サイドを歩け」が大好きになって、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドの1枚目のアルバム『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド&ニコ』を聴き直した。当時の俺は18歳で、もうある程度、内容を理解できるようになっていたんだ。もしかししたら、俺が新宿2丁目のロック・バーで働き始めたからかもしれない。

当時の新宿2丁目には、「ワイルド・サイドを歩け」のような世界がそのままあったから。機会があれば、この時期の思い出話もぜひ紹介させてもらいたいね。

ところで、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドの曲で俺の耳に最初に引つかかったのは、「僕は待ち人 (I'm Waiting For My Man)」。この曲は、ニューヨークでドラッグを買う連中のことを歌っている。

歌の主人公は、26ドルを手に握って、レキシントン・アヴェニューという大通りで「Man」を待っている。「Man」はアメリカ英語ではいろいろな使い方があ。警察のような力を持っている人によく使うが、ドラッグ・ディーラーのことも指す。ドラッグ・ディーラーを待っていると、黒人に脅された。「おい、白人野郎、なんでこちらにいらんだ？ お前らは俺たちの女に手を出してきたのか？」「すみません、そういうつもりじゃあないんです。友達「Man」を待っているだけなんです」。

ドラッグ・ディーラーはいつも遅れてくる。それがディーラーの仕事のやり方だ。最初は待ち合わせた場所に現れず、ほかの場所でチェックしている。ドラッグを持

って待っていたら捕まる可能性が高くなるから、買う人が見えてから渡しに行くんだ。この曲では、当時の一般社会にとっては衝撃的なそんな日常が、淡々と歌われている。

ルー・リードが亡くなったとき、アメリカのメディアは、ブライン・イーノが語った言葉をよく引用していた。『ヴェルヴェット・アンダーグラウンドの1枚目は3万枚しか売れなかったが、それを買った人たちの大半はバンドを始めた』。確かに、聴いた人間にアクションを起こさせるような何かを持つアルバムであることは確かだ。俺もヴェルヴェット・アンダーグラウンドのファースト・アルバムを当時買っていたら、バンドを始めたのだろうか(笑)。

実は、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドが70年代当時はそれほど売れていなかったことを知ったのは最近のことなんだ。あのアンディ・ウォーホルのバナナのシールが剥がせるジャケットは、とても印象的だったから、すごく売れたとばかり思っていた。なのに、あのデビュー・アルバムがたった3万枚ほどのセールスだなん

てね。

今になって改めてヴェルヴェット・アンダーグラウンドを聴くと、フレッシュユで、思っていたよりポップに思える。彼らの音楽は、大人になってから初めて分かるようなものかもしれないね。また、現代はこういうタイプのサウンドが多いから、彼らのテイストによく音楽が追いついたということなのかもしれない。しゃべりながら歌うようなスタイルには、近年のバンドがすごく影響されたのだと思う。

さて、この連載はこの回でいったん終了する。今まで読んでくれてどうもありがとう。しばらくしたらまたスタイルを変えて、今まで以上に様々な曲を紹介していこうと思っているの期待してくれ！ この連載は歌詞やメロディを掘り下げて聴くいい機会になって、俺自身にもいい勉強になったと思う。Thank you!



ジョージ・カックル / GEORGE COCKLE  
ラジオ・パーソナリティ。1956年、鎌倉生まれ。18歳で新宿2丁目のロック・バー<開拓地>で、音楽の世界にのめり込む。ハワイアンなどのCDをプロデュースする傍ら、インターFMでは音楽番組「レイジーサンデー」のパーソナリティをつとめ、音楽通ぶりを披露。さらにサーフ・イベントなどのMCでも活躍。  
http://whatsupmusic.inc.com